

富岡 宏太 提出 学位申請論文

『古代語文末助詞の研究』

論文の内容の要旨

本論文は、第一章「本研究の背景と意義」、第二章「命令形下接の文末助詞ヨ・ヤ」、第三章「体言下接の文末助詞カナ・ヤ」、第四章「体言下接の文末助詞ヨ」、第五章「カナとヤとヨの『詠嘆』について」、第六章「『詠嘆』と対話・独話」、第七章「詠嘆表現の構文の型」、第八章「今昔物語集の文末助詞カナ」、第九章「三代集のカナ」の九章からなる。

第一章では、本研究の射程とその意義を述べたうえで、先行研究のまとめを行い、議論の前提となる事項を整理する。

第二章では、命令形にヨが下接したもの（「命令形ヨ」）と命令形にヤが下接し

たもの（「命令形ヤ」）との違いについて、命令形単独で終止するもの（「命令形」）をも交えて考察する。考察は、①「命令形ヨ」「命令形ヤ」の表現可能な範囲、②指示内容を実行するかどうかについての対話者の選択権の有無、③「行為指示」に緊急性があるかどうか、の三点から行われる。その結果として、「命令形ヨ」「命令形ヤ」とともに「要求」の例に限られること、対話者の選択権を優先する表現は「命令形ヤ」よりも「命令形ヨ」に多いこと、そして緊急性については、「命令形ヤ」が緊急性のあるものに限定されるのに対して「命令形ヨ」には緊急性のあるものとなないものが見られることを指摘する。

第三章では、体言にカナとヤとが下接した「体言カナ」と「体言ヤ」とを対照する。その結果、「体言カナ」が対話者の属性を問わず、時間軸上の様々な位置にある事態に言及できるのに対して、「体言ヤ」は上位の対話者には用いられず、ほとんどの例が現在の事態に言及したものであることから、「体言カナ」は様々な事象を考慮した「ニュートラルな評価の表明」の表現であり、「体言ヤ」はそ

れらを考慮しない「臨場的な評価の表明」の表現であるとする。また「体言カナ」「体言ヤ」の表現性と構文とは密接な関係にあるとする。

第四章では、体言にヨが下接した「体言ヨ」についての調査・考察から次の五点を指摘する。①発話者と対話者との関係から見ると、「対話者あり」の例が「対話者なし」の例よりも多く見られる（ただし、「対話者なし」の例や地の文の例も少ないわけではない）点で「体言カナ」「体言ヤ」とは異なり、対人性の強い表現である。また、上位者にも下位者にも使用される点で、「体言カナ」と共通する。②発話者と対象事態との関係を見ると、「体言カナ」「体言ヤ」よりも表現可能な範囲がきわめて広い。ただし、事態そのものを示す例が典型であるという特徴がある。③「体言ヨ」に①のような特徴が見られるのは、「注意喚起」を行うだけの表現であるからだと考えられる。④「体言ヨ」は、対象事態そのものを投げ出すタイプの表現である。言及される事態そのものは時間・空間軸上の様々な位置に存在しうる。そのために幅広い領域をカバーすることができる。②

の特徴が見られるのはこのためであると考えられる。⑤「体言ヨ」、ひいては助詞ヨに共通する意味は、「注意喚起」であると考えられる。このように考えると、「連体形ヨ」「命令形ヨ」などとの関係も捉えやすくなるように思われるとする。

第五章では、ここまでのカナ・ヤ・ヨの考察をもとに、それぞれの「詠嘆」の質の違いについて述べる。

第六章では、助詞カナの調査・考察を通して、「詠嘆」という意味と、対話・独話のどちらに使用されるかという用法との関係について述べる。助詞カナは、「詠嘆」の意味を持つとされ、「うなあ」のような独話的性格の強い訳がなされてきたが、カナで終止したカナ終止文のうち特にコトカナで終止した文に、対話者を意識した対話的性格の強い例が見られることを指摘し、カナを単に「詠嘆」の助詞とすることに疑義を呈する。そして、①対話的性格の強い例がコトカナで終止する文のみに現れるのかという用法の問題、②カナが持つ「詠嘆」の意味と対話的性格の強い例のあることとはどのような関係にあるのかという意味の問題、

について調査・考察する。その結論として、①対話的性格の強い例がカナ終止文の構文の違いにかかわらず見られること、②「詠嘆」という意味と対話的性格の強さという用法とは異なる次元の問題であること、を指摘する。

第七章では、カナ・ヨの構文に基づいて、詠嘆表現とされるものの中にはいくつかの文型が見られることを指摘する。すなわち、詠嘆を表す構文を評価語句と評価対象を表す語句との関係から四種六類に分類し、カナ・ヨのとる構文の分布に差異が見られることを明らかにする。まず、ヨで終止する文には評価語句が現れることが少ないという先行の指摘を数値によって検証する。次に、カナで終止する文には、評価語句を中心とする例が多いものの、そうではない例も相当数見られることから、汎用性の高い形式であると主張する。この構文的特徴は、第五章までに確認した助詞の意味とも齟齬をきたさず、構文的特徴と助詞の意味とは密接な関係にあると考えられるとする。

第八章では、今昔物語集の文末助詞カナを取り上げる。和文資料と漢文訓読資

料とでは文末助詞カナの上接語句に違いがあるとされ、たとえば、和文資料には体言にカナが下接して構成された「体言＋カナ」の例が多く見られ、形容語がカナの直上に現れる「形容語＋カナ」は僅少であるのに対して、漢文訓読資料には「体言＋カナ」の例が見られず、「形容語＋カナ」の例が多く見られるとされている。しかしそのことを検証した論稿が見られないとして、巻ごとに文体の異なる今昔物語集におけるカナの上接語句の分布について調査が行われる。

その結果として、「形容語＋カナ（ヤ）」がより漢文訓読的、「体言＋カナ」、「動詞（句）＋カナ」がより和文的というように、カナの上接語句が文体と密接にかかわっていること、カナの承ける上接語句が文体をはかる指標となること、の二点が見出される。さらに、より和文的な本朝部に「形容語＋カナ（ヤ）」が使用され、より漢文訓読的な天竺・震旦部に「体言カナ」「動詞（句）＋カナ」が使用される理由についても考察を加える。そして、前者が発話者の位相に基づき意図的に使用されたものであり、後者が和文要素の介入により偶然に使用され

たものであると考えられるとする。

第九章では、三代集のカナを、その上接語の観点から調査し、韻文のカナが散文や漢文訓読資料のそれとは異なることを指摘する。また、「動詞(句) + カナ」の多さという点から観ると、散文のカナと韻文のカナとは同じような傾向を示すものの、情意・評価の形容語の使用の有無という点で、両者は大きく異なるとし、散文のカナには、情意・評価の形容語が多く用いられるが、韻文のカナにはそれがほとんど用いられないとする。この理由について、情意・評価の形容語による「一般化」を避けるためとする先行の指摘に加えて、前代のカモの特徴を引き継いでいる可能性を考えることも重要であるとする。

論文審査の結果の要旨

申請論文『古代語文末助詞の研究』は、平安時代の「詠嘆」の意を表す助詞

「カナ」「ヤ」「ヨ」の意味・用法について考察したものである。

古代語の助詞の名称は、格助詞・接続助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞の六種に分類する山田孝雄氏の分類によるのが一般的であるが、本論文では、対象とする助詞が終助詞や間投助詞に分類され、その適否を論じることが目的ではないことから、出現する位置によった「文末助詞」という名称を用いている。

助詞の研究史において、終助詞・間投助詞に関する研究は手薄であり、特に「詠嘆」の意を表す助詞についての研究はほとんど見られない。「詠嘆」の意を表す助詞は、解釈する際に「なあ」「ことよ」など文脈に応じた現代語訳を施せば事足りると考え、助詞の異なりや用法の異なりによる意味の差異に関心が持たれなかったことや、意味の差異を示す客観的な方法を確立しにくいことなどが、研究を進めるうえでの障壁となっているものと思われる。そのような中で、本論文が「カナ」「ヤ」「ヨ」を採りあげて新たな分析の観点を提示し、その意味・用法の差異を指摘した点は評価に値する。

本論文の分析の観点として、同じ条件で助詞が異なる場合に着目した点がまず注目される。例えば、「ヤ」の意味・用法を考察する際に、命令形に接続する用法（「命令形ヤ」）と体言に接続する用法（「体言ヤ」）とに分け、「命令形ヤ」を命令形に「ヨ」が接続する用法（「命令形ヨ」）と比較し、「体言ヤ」を体言に「カナ」「ヨ」が接続する用法（「体言カナ」「体言ヨ」）と比較することで、他の助詞との差異を見出して用法ごとの特徴を示したうえで、「命令形ヤ」「体言ヤ」に共通する特徴を見出し、「ヤ」の意味・用法を確定していくという周到な分析の仕方である。また、助詞の差異を明らかにする際に、表現された事態が発話者・対話者にとってどのような性質を持つ事態なのかに着目して分析を行ったところにも独自性があり注目される。

如上の観点によって、まず「命令形ヤ」と「命令形ヨ」とを比較し、「ヤ」「ヨ」を用いた用法は、命令形を単独で使う用法に比べて表す範囲が狭く、いずれも「要求」を表す場合に使われる対人性の強い表現であることを示した。また、発

話者と対話者との関係を分析した結果、「ヨ」は敬語使用の多いところから対話者の選択権を優先する表現であることを示し、発話者と事態の関係を分析した結果、「ヤ」は緊急性がある場合に用いられる表現であることを示した(第二章)。次に、「体言カナ」と「体言ヤ」とを比較し、発話者と対話者との関係の分析から、「カナ」は上位者にも下位者にも使えるのに対して「ヤ」は上位者には使えないことを見出し、発話者と事態との関係の分析から、「カナ」は過去・現在・未来のいずれの事態をも表せるのに対して「ヤ」は現在の事態に限られることから、「カナ」は「ニュートラルな評価の表明」、「ヤ」は「臨場的な評価の表明」を表すとした(第三章)。また、このような「ヤ」の特徴は「命令形ヤ」の緊急性がある場合に用いることに通じることを指摘した(第五章)。次に、「体言ヨ」を「体言カナ」「体言ヤ」と比較し、「ヨ」は「カナ」「ヤ」よりも対人性が強く表現領域も広いところから、「詠嘆」の意を表すのではなく、「注意喚起」の意を表すものとした(第四章)。さらに、このようにして得た助詞の意味の異なりが、

文型の異なりとなって現れていることを示し、助詞の意味と構文が密接に関わっていることを主張した（第三章・第七章）。

具体的な数値と実例の丹念な読解に基づいて導き出された以上の見解は、大いに注目され評価されるものである。なお、「体言カナ」と「体言ヤ」とを分析した、本論文の第三章の元になった論文は、日本語学会の機関誌『日本語の研究』（10巻4号、平成26年10月）に掲載され、二〇一四年度日本語学会論文賞を受賞していることから、既に一定の客観的評価を得ているものと言えよう。

また、本論文では、和文資料を中心に据えて考察を行っているが、文体に対する配慮がなされている点も注目される。「カナ」が形容詞・形容動詞を受ける用法は漢文訓読的、体言・動詞を受ける用法は和文的であることを、文体差の見られる今昔物語集という適宜な文献を使用することによって検証した（第八章）。一方、韻文の「カナ」は、情意・評価を表す語が用いられにくいという散文とは異なる特徴を指摘し、上代の「カモ」の特徴を引き継いだものであるという興味

深い推論をしている（第九章）。

さらに本論文は、「詠嘆」の意が対話者の有無と関係ないことを論じる（第六章）など、古代語のみならず現代語の研究にも波及する指摘も行っている。今後、本論文で取り扱わなかった他の文末助詞の分析も期待される。

以上により、本論文の提出者富岡宏太は博士（文学）の学位を授与される資格があると認められる。

平成二十八年二月十五日

主査	國學院大學教授	大久保一男	印
副査	國學院大學教授	吉田永弘	印
副査	聖心女子大学教授	小柳智一	印
	國學院大學大学院兼任講師		

富岡 宏太 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十七年十二月十七日

学力確認担当者

主査 國學院大學教授 大久保 一 男 ⑩

副査 國學院大學教授 吉田 永 弘 ⑩

副査 聖心女子大学教授 小柳 智 一 ⑩
國學院大學大学院兼任講師